

E・ロジャーズ著

## 『農民意識の近代化過程——コミュニケーションの衝撃——』

*Modernization Among Peasants: The Impact of Communication*, By Everett M. Rogers in association with Lynne Svenning, Holt, Rinehart and Winston, INC., New York, 1969, 429 p.

本書に関するごく簡単な紹介（書評者による）はすでに農林統計協会『農林図書資料月報』、21巻5号、1970年に掲載されている。

## I

本書は農民意識の近代化過程に関する研究である。著者によると、近代化過程は基本的には新しいアイデアがある社会体系の中に外部から持ち込まれるコミュニケーションの過程である。副題の意味がそこにある。学問分野は社会心理学。分析の枠組はマーソンのいわゆる中範囲理論。分析の手法は二変数相関、偏相関、多変量解析、因子分析が中心である。対象はコロンビアの五つの村に住む255人の農民である。

著者ロジャーズは現在ミシガン州立大学の教授であるが、本書の基礎をなすフィールドはアイオワ州立大学に在職していた時に行なわれている。もともとアメリカ合衆国のコミュニケーションが専門であるが、しだいに関心が後進国に向けられ、最近の論文はそのほとんどが後進国におけるコミュニケーション過程に関するものである。

本書は大別して三つの部分より構成されている。第1章から第3章までは、研究の目的概念構成、方法論の説明、第4章以下第13章までは、近代化過程分析のための主要な概念変数と、その相互関連性の検討。そして第14章から第16章までは、因子分析による諸変数間の関連性の図式化、SINDIモデル(Simulate Innovation Diffusion)による技術普及経路の予測、農民意識の近代化過程研究に残された問題点等が収められている。

著者の問題意識の中で重要なのはまず、先進国によって指導されている後進国の農業開発、発展計画は主として経済学者によって立案され、しかもそれらの計画は予期した成果を挙げていないこと。その原因は詰まるところ農民に対する不理解とコミュニケーション・システム

の欠陥と考えられることである。したがって社会学、社会心理学の分野から農民の行動様式とその変化に関する研究がもっとなされなければならないという主張が生まれてくる。農民意識、行動の近代化過程は、著者によると、基本的にはコミュニケーション過程であるから、農民意識、行動がコミュニケーションによっていかに変化していくかを調査することが必要である。本書はこういう問題意識に基づいて行なわれたコロンビアの農村調査の成果である。

## II

まず本書の概念構成を明確にしておこう。本書で用いられている近代化(Modernization)とは、「個人がある伝統的生活様式から、より複雑な、技術的に進歩しかつ急速に変化する生活様式に移行する過程」である。社会変動(Social change)とは社会体系(Social system)の構造と機能に変化の起きる過程であり、三つの段階がある。新しいアイデアが創出される過程(Invention)、そのアイデアが社会体系内に伝達される過程(Diffusion)、そしてその結果社会体系内に生起する様々な反応(Consequence)である。社会変動は二つの型に分けられる。内発的変動(Immanent change)と触発的変動(Contact change)である。前者は新しいアイデアが内発的に創出され普及することによって引き起こされる変動、後者は外部からのインパクトによって変動が誘発される場合である。後者はさらに二つの場合がある。一つはあるアイデアが偶然に、あるいはさしたる意図なしに外部から持ち込まれ、それが内部で選択的に採り入れられる場合(Selective contact change)であり、他は当初からあるアイデアを導入普及するのを目的とし、その結果内部に変動の起きる場合(Direct contact change)である。コミュニケーションは、社会変動の3段階の中の第2段階、つまり新しいアイデアが普及する過程を対象としている。したがって新しいアイデアは外生変数とされるのが常である。コミュニケーションの簡略化されたモデルはS—M—C—R—Eで表現される。つまりニュース源(Source)があり、それがメッセージ(Message)となり、あの経路(Channel)を通じて個人(Receiving individual)に流され、その結果ある種の効果(Effect)が反応という形であらわれる。

農民意識の近代化過程をコミュニケーションの過程として位置づけるには、コミュニケーションを規制する諸要因を明確にしておかねばならない。そのために著者は

農民の性格規定に関する一般化を試みる。それによると農民に共通する要素は以下ようになる。(1)農民相互間の不信任感、(2)物的供給量の固定性、つまり他人の得が自分の損に直結するという思考方式、(3)政府当局への依存と敵対意識、(4)家族主義、つまり家族全体の利益が成員個々人のそれより優先すること、(5)革新性の欠如、すなわち変化に対する抵抗感、(6)宿命観、(7)限られた願望、(8)刹那主義、つまり将来のより多い報酬より現在の満足感を優先させること、(9)視野の狭さ、および時間的感覚の少なさ、(10)低い感情移入(Empathy)、すなわち他人の立場に立って物を考えることが少ないこと。農民の性格を規定するこれらの諸要素の中から後に述べるように近代化過程分析のための諸変数が抽出されることになる。

さて本書の分析の枠組とでも言うべきものは、ロバート・マートンがその著『社会理論と社会構造』に展開した中範囲理論(Middle Range Theory)である(注1)。本書では中範囲分析(Middle Range Analysis)と言っているが、その意味は、「高遠」な理論(Grand Theory)と「生」の体験主義(Raw Empiricism)のギャップを埋めるのに有効な分析方法である、ということである。著者によると、「高遠」な理論は現実との乖離がひどく、その正当性を立証できるように組み立てられていない。逆に「生」の体験主義は、個々の事実の集積という点では評価される。しかし、たとえば500を下らないインド農村の実態調査から、インド農民の生活様式に関する一般像を得ることはほとんど不可能である。両者の中間に位する中範囲分析は、したがって二つの条件を満たさねばならない。第1は、必ず理論から導かれる作業仮説をもつこと、しかもそれは実態調査により立証されねばならない。第2に、調査の対象はあくまで個別農民であるが、1国1村モデルではなく1国複数村、複数国複数村モデルにすること、である(注2)。

(注1) Merton, Robert K., *Social Theory and Social Structure* (New York, Free Press, 1957).

(注2) この方法は社会学・社会心理学に特有のものではない。たとえばコーネル大の土地経済学(Land economics)の教授H・コンクリンもMacroとMicroの中間のMini-Macroという中範囲の概念を土地経済区分(Economic land classification)に用いている。

### III

農民意識の近代化過程をコミュニケーションの問題として分析する場合の手掛りは、以下に示す九つの主要な

概念変数間の相互関連性である。選択された変数は、同じ中範囲理論を用いて西アジア6カ国300人の農民意識の近代化過程を調査したダニエル・ラーナーのものとはほぼ同じである(注1)。それらは、(1)識字度合(Literacy)、(2)大衆伝達手段との接触(Mass Media exposure)、(3)外界との接触(Cosmopolitaness)、(4)感情移入(Empathy)、(5)業績に対する動機づけ(Achievement motivation)、(6)宿命観(Fatalism)、(7)革新性(Innovativeness)、(8)政治的知識(Political Knowledge)、(9)願望(Aspiration)、である。著者はこれらの主要な概念変数を三つに分類している。第1は効果変数(Consequent variable)で、コミュニケーションの結果として生起する近代化の指標である〔たとえば(7)~(9)〕。これはいわゆる従属変数と言われるものに相当すると考えて良い。第2は先発変数(Antecedent variable)、つまり独立変数に順ずるもので、効果変数を規制する関係に立つ〔たとえば(1)~(3)〕。第3は媒介変数(Intervening variable)と呼ばれるもので、先発変数と効果変数の媒介機能を果たすものである〔たとえば(4)~(6)〕。ただ分析の過程では個々の変数がどの分類に属するかは固定的でなく、ある時は先発変数になったり媒介変数になったりしている。第4章から第13章までは、これらの各変数ごとに1章を設け、その中で他の変数間との相互関連性を2変数間の相関分析(あるいはゼロ次相関)、多変量解析(その主力は重相関分析)および複数変数を用いた1次偏相関分析によって明らかにしようとしている。以下簡単にその分析結果を紹介する。

まず識字度合。これは識字度合が高ければ大衆伝達手段との接触も多くなり、その結果高い感情移入、革新性、願望等が導き出されるだろうという想定のもとに、識字度合と、その他の変数間のゼロ次相関係数が測定されている。それによると政治的知識との相関がいちばん高く0.44、次が革新性(0.43)、以下大衆伝達手段との接触(0.42)、感情移入(0.39)等となっている。一応全変数とプラスの相関を示している。

次に大衆伝達手段との接触。概念的にはこの変数の先発変数として識字度合、教育、社会的地位、年齢、外界との接触が挙げられ、効果変数としては感情移入、革新性、政治的知識、業績に対する動機づけ、願望が挙げられる。分析としてはまず2変数間の相関係数が計測される。年齢を除いてすべての変数とプラスの相関を示し、その値は、0.3~0.6に集中している。次に大衆伝達手段との接触という変数が媒介変数として有効か否かの測定が行なわれる。これは識字度合を従属変数とし効果変数

として挙げられた五つの変数の各々とのゼロ次相関係数が測定され、次に大衆伝達の変数を加えた偏相関係数が計測される。つまりゼロ次相関の場合には効果変数の中に大衆伝達手段への接触という要素がすでに含まれていると考える。したがって偏相関分析においてその大衆伝達手段への接触という要素を統御したうえで識字度合と各効果諸変数間の相関係数を計測する。もしゼロ次相関係数と1次偏相関係数の間に著しい差が生じる場合、大衆伝達という変数は媒介変数として有効であると見なすわけである。分析の結果はその有効性を示している。つまりその意味は、識字度合と政治的知識の関係は大衆伝達手段との接触を媒介として始めて有機的に説明できる、ということになる。次にこの変数を従属変数とし先発変数のすべて、および効果変数のすべてを独立変数とした重相関分析を行なっている。

外界との接触という変数は、その近似値を都市へ出かける度合に求めている。考え方としては、都市への交通手段、社会経済的要因(社会的地位、農家規模、生活水準等)、職業、個人の資質が都市への接触、大衆伝達手段への接触等を容易にし、その結果近代化に必要な諸現象を生起せしめる、という立場をとっている。分析の結果はいちおうこの考え方が誤っていないことを示している。

感情移入(Empathy)はラーナーが最も重視した変数であった(注2)。この調査でも近代化の潤滑油としての機能がテストされている。先発変数としては識字度合、大衆伝達手段への接触、外界との接触が考えられ、効果変数としては今まで繰返し述べてきた革新性、願望その他の諸近代化指標が挙げられている。ゼロ次相関では0.25から0.52までのプラスの相関を示し、中でも大衆伝達手段との接触、政治的知識とのそれが高い。重相関分析でもだいたい同じ結果が出ている。ただ近代化の潤滑油たりうるか否かをテストする1次偏相関分析においては、感情移入は媒介変数としては不十分であるという結論が出ている。またこの変数と識字度合、教育に対する願望を除く諸変数間の関係の強弱は個々人の社会的地位に依存するという結果も紹介されている。要するにラーナーの結論を補強する結果にならなかったことは明らかである。

業績に対する動機づけ(Achievement motivation)はあまり良い訳ではないが、その意味内容は、あるもの事を、社会的に認めてもらいたいとか、信望を得るためではなく、もっと内的な充実感を得るために行ないたいとい

う欲求である。ここでは効果変数としては教育、職業に対する願望のみがとられ、この変数を規制する先発変数として出生順位、大衆伝達手段への接触、感情移入、教育、識字度合、政治的知識、外界との接触、変革を導入する機関(たとえば普及員)との接触が数えられる。ゼロ次相関係数は0.1~0.4の間で、とくにこの変数と効果変数とのそれが低い。また出生順位と変革を導入する機関とは予期に反してほとんど相関関係がない。

宿命観に関してはまず3因子による分析が行なわれているが結果的には変動の44%しか説明しないため、10変数のゼロ次相関分析、先発8変数との重相関分析を行なっている。考え方としては識字度合、感情移入、外界との接触、伝達手段との接触が宿命観を減ずる作用をおよぼし、その結果近代化現象が起こることを想定する。分析結果はいずれも予想通りのマイナスの相関が得られるが、その数値はきわめて低い。重相関分析では先発変数に生活水準、社会的地位、農家規模、教育等を入れているが、決定係数はわずか0.19にすぎない。1次偏相関分析も行なわれ、その結果宿命観は媒介変数となりえないこと、つまり宿命観が近代化の阻因であるとする議論に対する反論が提示されている。

革新性に関する分析では、まず近代的村と伝統的村を別々に分析している。そして前者の場合、化学肥料が最初に導入されてから、村の90%の農民が使用するにいたるまで、約40年かかっており、時系列的にその普及型はS型をなす。後者の場合、前者において化学肥料が、急速に普及しはじめた時点から約10年余のタイムラグを経て、急速に25%の農民が使用しはじめたことが示されている。前者における革新性の原因を追求するために35変数を用いた重相関分析を行ない、決定係数0.45を得ている。さらにこの中から重要な5変数を選び0.349の決定係数を得ている。その5変数とは感情移入、オピニオン・リーダーシップ、農家規模(土地および労働)、教師との接触である。後者の場合11変数を用い0.664の決定係数を得ているが、両者の変数間にあまり共通性はない。

以上説明した主要変数の他に、オピニオン・リーダーとコミュニケーション経路に関し2章を費している。前者に関しては、重相関分析により外界との接触、大衆伝達手段との接触、社会的地位の高い者の中にオピニオン・リーダーが見い出されること、そして往々にして特定個人に集中して見い出せること(Polymorphic)を指摘している。また村の中に高い同源同質性(Homophily)があると新しいアイディアの下降伝達性は遅くなることも指摘

される(注3)。後者に関して重要と思われる指摘は、新しいアイデアの普及に際し個人間の伝達経路と大衆伝達経路は排他的でなく補完的であること、後者はアイデアの存在を知るうえで重要であるが、実際の普及過程では前者の方がはるかに強力であるという結論であろう。

(注1) Lerner, Daniel, *The Passing of Traditional Society: Modernizing the Middle East* (New York, Free Press, 1958).

(注2) ラーナーは前掲書において、感情移入の高い農民は近代性をもつことを立証し、かつ急速な社会変動によって経済成長を達せんとする場合、最も基本的な人的要素は感情移入であることを銘記すべきである、と主張している。

(注3) Homophily は具体的には、地主集団、小作集団等を考えることができよう。社会的地位が同じでその他の社会経済的諸要素が類似している集団である。ここでの指摘は、たとえば機械化が地主集団に普及しても、それはただちに小作集団に普及しないということの意味する。

#### IV

これまでは主として相関分析を用いた分析であったが第14章においては因子分析を用い各変数間の相互関連性を図式化している。選ばれた3本の柱、つまり因子には、(1)外部からの伝達を吸収しうる能力、(2)変化に対応しうる能力、(3)革新的な指導性、がある。これら3因子と各変数間、および各変数相互間の相関係数がクモの巣状に図式化されている。

第15章では技術革新の普及過程とパターンの推測のために SINDI モデルが用いられている。従来この種の研究は空間的要素を重視し、社会構造的、心理的要素を閑視してきた反省から、カールソンの示唆的研究を援用している(注1)。方法はまず比較的閉鎖的な小村落を抽出する。次に農民をある基準で同源同質性をもつグループに分割する。この調査では67人の小村落を選び六つのグループ(Clique)に分け、外部の情報を伝達するものとして普及員と教師を考えている。そしてグループ内の成員が外部からのアイデアを採用する確率、他のグループからアイデアを採用する確率等々6個のパラメーターの推計を行なう。こうして組み立てられたモデルから推計された普及パターンは実際のデータ(1947~62年)と比較されている。結果的には1954年以降推測値が大幅に実際値を過少評価している。

最終章は今までの後進国近代化研究の反省と今後の方向を示唆する諸点の指摘を行なっている。まず反省点として第1に開発の社会的側面を閑却視してきたこと、第2に社会科学における各分野間の協力体制が不十分であったこと、第3は行動科学に対する理解の遅れと調査資金の不足、第4に調査担当者がデータの蒐集のみに専念し、その結果を被調査国の役に立たせることが少なかったこと、そして最後に調査担当者の方法論にある種の文化的制約があったこと、である。そして今後調査の項目として重要だと指摘されるのに、個人人間の信不信関係、身分階層性、生活水準による階層間格差、工業化と都市化、ナショナリズム、政治的無気力性等がある。

(注1) 空間的要素を重視した研究は、たとえば、Hägerstrand, Torsten, *The Propagation of Innovation Waves* (Lund, Sweden, Royal University of Lund, 1952)。カールソンの業績は Karlsson, George, *Social Mechanisms: Studies in Sociological Theory* (New York, Free Press, 1958)。

#### V

以上が本書の内容である。このようにやや詳細に内容を紹介した理由は二つある。一つは経済、特に農業開発計画には社会学、社会心理学的諸要素の考慮が必要であると主張される(注1)。この意味で本書は、社会学、社会心理学的諸要素がどう扱われるべきかについて一つの方向を打ち出したものであるという点である。いま一つは、コミュニケーション分析、中範囲理論という方法論をこの際紹介しておきたいという欲求である。以下書評に移る。

本書は現実的、かつ良識の問題意識をもち、現在知られている数多くの分析用具を用いて分析した点その意欲は評価できる。しかしながら読後説得されたという感じや、ある種の感銘を一向に受けないのはどうしてだろうか。その理由は、だいたい3点に整理できるだろうと思う。第1は中範囲理論の持つ欠陥である。ラテン・アメリカの専門家でもない書評者が、べつだん異和感をもつことなく読めたのは、換言すればこの調査の中でコロンビアという国が十分描かれていないということである。その原因は、課題中心に数カ村の若干の農民の意見を聴取し、それがあある意味では中立化された数字として画一的に把握され提示されているからである。一つの答の背後にある各村の諸条件、数カ村に共通する社会経済的諸条件、ひいてはコロンビアという国の持つ特性がまったく

考慮の対象になっていない。これは明らかに本書で用いられている中範囲分析の欠陥である。ただこれをもって中範囲分析を否定し去ることは誤りであろう。それは方法論そのものもつ欠陥というよりはその援用の仕方の問題があり、もっと具体的に言えば、それは詰まるところ地域研究者が中範囲分析を用いる場合と、各分野の専門家が分析方法のテストのために地域を題材に用いる場合との相違であろうと思われる。

第2はデータの整理の仕方と評価の問題である。相関分析は変数間の変動に関する相関度を測定する方法であり、変数間の因果関係を明らかにする方法ではない。このことは著者も十分承知しているはずである。にもかかわらず往々にして因果関係の論理的つながりを解明することなく変数間の関係が論じられている。また統計学の基準としても相関係数にしる重相関係数にしる、あるいは決定係数にしても0.2~0.5という数値はあまりにも低すぎる。この数値で本書に書かれているような断定的結論を下すのは危険である。重相関分析の場合、もっとも厄介な問題は多重共線性である。それは相関マトリックスによって独立変数相互間に高い相関が存在するか否かを判断するのが普通である。すでに紹介したとおり各変数間のゼロ次相関係数は0.5以下であるから当然多重共線性の問題はなく、各数値は有意な値をとることになる。しかしこれは問題である。常識的に考えても識字度合と教育とは高い相関を示すに違いないし、土地所有規模と生活水準も高い相関をもつかもしいない。こうした諸変数が独立変数の中に含まれている場合多重共線性を警戒すべきである。それが出て来ないということは諸変数の数量化のスケールに問題が多いということである。それは各変数間の相関度がほぼ均質的であることから疑いが持たれる。可能性としては、かりにスケールが現実を反映するくらい改良されたとすれば、ここで行なわれている多変量解析の大方は使い物にならないこともありうる。また多重相関分析の場合、いかに決定係数が高くても符号が非論理的なら使ってはならない。二、三こうした例も本書には見出しされる。この種の困難は因子分析でも同様で、特に相関度が均質的であることが説得力を欠く一因となっている。

第3に変数の立て方の問題である。著者も認めるとおり説明変数を極端に単純化していることからくる物足りなさが残る。第1の批判点にも関係するが、たとえば感情移入という変数がある変数と相関度が高いとしてもその因果関係はかならずしも明らかでない。したがって成員

間の感情移入が低い場合、これと相関度の高い変数に作用すれば、感情移入が高くなる、という論理が本書の分析では出て来ない気がする。また変数の選択で社会心理学という分野を意識しすぎ、経済的変数の考慮が著しく欠けている点も、著者もちよっと述べているとおり、問題がある。また変数は相互に排他的であることが統計分析には望ましい。人間行動の諸側面を示す行動変数がこの条件を満たすうえに多くの困難を持つことはすでに触れたとおりである。しかし本書では変数間の独立性を過信し、意味のない組み合わせが行なわれている場合がある。たとえば農業における革新性が従属変数である重相関分析において、家庭内の革新性や自己評定の革新性 (Self-perceived innovativeness) が独立変数になるのはあまり意味のないことである。

最後に基本的概念や分析に見られる一種の文化的制約 (Cultural-bound) を挙げねばならない。近代化の定義はそれを示している。また分析方法における計量化は無分別に否定する必要はないが、本書の場合、計量化されたもののみが独走し、計量されなく、しかも補完的と思われる諸要因がまったく落ちていたために、きわめて「狭み」のない分析に終わっている。

いかなる本も学ぶべき何物かを持っている。そうでなければ書評する必要もないわけである。本書のメリットは社会心理学の分野でコミュニケーションの問題を扱う際の一つの資料としての価値である。学説史のフォローもレファレンスもしっかりしている。分析にはすでに述べたとおり問題があるが、章ごとに論ぜられている各変数に関して今後に残された問題点は参考になる。欲を言えば計量化に用いた質問紙、スケール、集計方法を一括して整理してほしかった。

(注1) 一つの例に最近書評した Kusum Nair の著作はこの点を強く主張している。K・ナイール著『孤独な農民——アメリカ、日本、インドの比較農業論』(書評者平島成望) (『アジア経済』, 第11巻第3号, 1970年3月) を見よ。

(調査研究部 平島成望)